

芦屋ゆかりのスポーツ人物像①



さるまるきち ざ えもん
猿丸吉左衛門

日本スポーツ界に輝いた“巨星”

1903（明治36）年／兵庫県芦屋生まれ

芦屋が生んだ偉大なスポーツマンの一人に猿丸吉左衛門がいる。日本のスポーツ黎明期に万能で鳴らした。

陸上競技では砲丸投げ、ハンマー投げに日本記録をつくり、“投てき王”の異名を取ったほか、相撲では学生横綱となり、ラグビーや柔道などでも活躍した。戦後は地元の芦屋市長、兵庫県議会議員を歴任し、実業家としての手腕も振るった。晩年は健康づくりの「生涯スポーツ」に目を向け、ニュースポーツの一つ、「ローンボウルズ」の普及、奨励に努めた。

● 豪放磊落（ごうほうらいらく）の人柄

豪放磊落、猿丸吉左衛門はまさにそうだった。豪放磊落とは、国語辞典によると「度量が大きくて、細かいことにこだわらないこと」とある。猿丸の人柄はまさにそれ。180cm、120kgの堂々とした体格に、風格も備わっていた。1903（明治36）年に芦屋市の旧家で生まれた猿丸家のルーツを探ると「奥山に紅葉ふみわけなく鹿の声聞くとときぞ秋はかなしき」と詠んだ猿丸大夫とされる。猿丸大夫は万人に知られる百人一首は三十六歌仙の一人である。ここに登場する猿丸は「吉雄」と名付けられたのだが、世襲により「吉左衛門」を引き継いだ。学生時代に陸上の砲丸投げとハンマー投げで日本記録をつくり、歴代樹立者として記載されているのは、猿丸吉雄である。

● 相撲は学生横綱、陸上では投てき王



「初代学生横綱であった猿丸氏」

格闘技の専門とかけ離れた余技としてはじめたスポーツのうち、名前を刻む活躍をしたのが陸上だ。陸上への誘いを受けた時「なに？投てき（てついの砲丸）投げか。角力（すもう）や柔道の激しい練習に比べりゃあ、楽なもんやろ」と軽い気持ちで引き受けた。猿丸は1921（大正10）年に始まった陸上の関西学生対校選手権大会に登場、砲丸投げ9m44、ハンマー投げ24m25の2種目で初代王者となった。次年はハンマー投げで31m30の日本新をマークしてV2。だが、砲丸投げは10m01と記録を伸ばしたが、惜しくも2位。1923（大正12）年の第3回大会は砲丸投げで11m17の大会新で2年ぶりに王座を。余談だが、第1回大会が行われた鳴尾運動場（西宮市）は、1916（大正5）年に鳴尾競馬場内に新設され、トラック1周800m（通常400m）、直線400m（同100m）という代物で東洋（アジア）一と称した。

● “猿丸流”の創意工夫



「陸上投てき王でもあった猿丸氏」

猿丸が「投てき王」として存在感を示したのは、関西学生の大会に限らず、1922（大正11）年の第10回日本選手権大会に10m48で優勝したり、翌23年には11m44の日本記録を更新する11m57の日本新を出す活躍をしたからだ。ハンマー投げでは1922年から1926（大正15）年にかけて、5回日本記録を打ち立てた。先述の関西学生での31m30をはじめとし、34m41～34m705～36m78の後、1926年5月30日に行った第2回京大対同志社大（京大にて）で、40m87の空中アーチをかけ、日本人の40m台スローワーとなった。猿丸の現役時代は、日本陸上界にとって創世記であり、記録だけでなく技術的にも現代とは比較にならない。猿丸として「私らの頃はハンマー投げを例にとると、ただ力まかせにワン・ターンで投げていただけ。今のような4回転なんて、夢のまた夢のような話」の後、「そうかと言って科学的を無視した訳ではないけど、ただひたすら、がむしゃらに練習した時代だった」と続けた。こう話す猿丸だが、むやみやたらに練習するだけでは、日本記録などをつくれるはずがない。猿丸流ともいえる創意工夫を凝らしたことで、結果につながったのだ。先述した相撲での“突き”を編み出したように、ハンマー投げで飛距離を出すには「ターンを1回より2回に増やして、よりスピードを加えてハンマーを振り切った方が遠心力が増す」とワン・ターンをツー・ターンへの切り替えの工夫をしている。猿丸独自の手法に呼吸法も加わる。相撲、柔道やボクシングなどの格闘技で言われる「呼吸の間」を陸上の投てきにも用いた。「息を吐く、吸うの“呼吸の間”をうまく捕えることがカギ」と。投てきの補強運動の一環として、速力・脚力を付けるためスタートダッシュとか跳躍練習を取り入れた。が、ある日、走り高跳びの練習中に不運にも脚を故障してしまった。まさに不運。この故障が1924（大正13）年の第8回五輪パリ大会の投てき代表の内定をフイにしたのだ。

● 破天荒な渡欧&画期的イベント

自らの練習で故障し、五輪代表の座を棒に振った猿丸だが「それなら五輪見学を」と、大学には休学届けを出し、ある新聞社と掛け合い、強引に特派員の肩書の許可をもらい、渡航した。猿丸ならではの真骨頂を発揮しての洋行だ。五輪観戦だけではない。フランスでは陸軍士官学校で柔道の模範演技を。英国ロンドンでは何とボクシングの指導まで。帰国に際しての長い船旅では後日談が。カナダのハリハックス港に停泊中に、タグボートの船体名に「東郷丸」の文字を目に留めた。日露戦争の日本海海戦で世界に名を馳せた海軍の名将・東郷平八郎のネームだ。晩年、猿丸は「まだ、タグボートが保存されているなら、買い取りたい」と聞き取りを試みたが、これは夢に終わった。

猿丸はスパイクを脱いだ後、兵庫陸上競技協会の副会長を1936（昭和11）年～1945（同20）年。会長職を1946（昭和21）年～1951（昭和26）年の要職を務めた。戦後は白紙状態にあった組織の再建に労力を惜しまなかった。

話を戦前に戻してみる。1936（昭和11）年にベルリン五輪の長距離で大活躍し“世界のヒーロー”となった村社講平（当時の中大―川崎重工入社）を神戸に招き、同年11月28日に神戸市民運動場（神戸の西代）で「村社講平選手に5000mを挑む会」のイベントを開いた。猿丸の意図は「兵庫、近畿地区の長距離界に刺激と新風を」にあった。村社の力走を「ひと目見たい」と、集まった観客は35,000人。アマチュアのスポーツにおける有料プログラムは例がなかった時代、1部10銭で販売したところ、7,000部がアツという間に売り切れた。村社人気に加え、猿丸が見せた「商売上手」の一例だ。一方、レースでは珍事が…。村社の圧勝は当然としても、ゴールタイムは15分11秒4と平凡なもの。ベルリンで14分30秒0の日本記録で4位入賞した記録より、41秒4も劣ったのだ。「村社のレースに見とれた決勝審判員が、ストップウォッチを止め忘れたのが真相らしい」とは後年の猿丸談。

● 生涯スポーツに目を向けた晩年

戦後、1948（昭和23）年に芦屋市長となり、市制の舵取りを司る傍ら“スポーツマン市長”として知られた。市長に立候補した時のユニークな立ち会い演説会は割愛するが、なぜ行政マン、それも首長なのか。猿丸の胸の内は「芦屋100年の大計を立て、国際文化住宅都市を目指した」で、「国から指定してもらえたことが自慢や」。市長は1期でやめている。晩年は誰にでも手軽に出来る「みんなの健康づくり」に力を注いだ。数多い「生涯スポーツ」の中で、猿丸が勧めたのはローンボウルズだ。同スポーツは1962（昭和37）年に日本へ。2年後の東京五輪の年に豪州・水泳陣のコーチが六甲山で始めたのを猿丸が見習い「（ローンボウルズは）高齢者でも無理なくできる」と判断し、広く一般に推進、指導に当たった。1976（昭和51）年2月に南アフリカ共和国のヨハネスブルクで開催された第3回世界ローンボウルズ選手権大会に、初参加の日本チーム団長兼選手（当時、日本協会会長）として飛び立ったこともある。72歳だった。ほかに兵庫陸上競技協会会長、芦屋市体育協会会長なども務めた。「スポーツマンの最高理念は、真心を尽くすこと」。「競技者は勝つために努力しろ」。「勝者は常に美しい」の格言を残している。

（文責：元神戸新聞社運動部長 力武敏昌）

